

English Garden 第100話

"Go down an'tell 'em... Maybe they'll know then."

John Steinbeck

「さあ、流れていって話してやれ。そうすればみんなにわかるだろう」
ジョン・スタインベック

ジョン・スタインベックの『怒りのぶどう』の5回目(最終回)です。

トムもいなくなって淋しくなった有蓋貨車のキャンプに、ひと時の喜びがありました。アルが、同じ貨車を分け合うウェンライト家の娘アギーと結婚することになったのです。両家の人たちはコーヒーとホットケーキでささやかなお祝いをしました。

間もなく冬の雨が降りはじめ川の水かさが増し、このキャンプにも水が入ってきました。父のパーは貨車の住民と協力して堤防を築こうとしますが、堤防は結局押し流され、どの家のトラックも水浸しになって移動もできなくなりました。

そんな中でローズ(オブ・シャロン)は産気づき、死産をします。いまでは悲しみの象徴でしかなくなったその子をどこかに埋めてやってほしいとマーに頼まれ、ジョン伯父は子どもをりんご箱に入れて腰まで水に浸かりながら川辺まで行きます。そして、表題の言葉をメッセージとしてつぶやきながら柳の木の脇で水に流すのです。



ついに貨車の中にも水が入ってきたので、一家はローズを助けながら向こうの丘に見える小さな小屋に急ぎました。

小屋の入り口には農具が置かれ、間仕切りの奥には乾草が積んでありました。よく見ると、部屋の隅には男の子がいて、そばに父親らしい中年の男が横たわっていました。男の子はローズに乾いた毛布を貸してくれましたが、その子の話によると父親は餓死寸前で、「パンを盗んで食べさせたが吐いてしまった、スープがミルクでなければ受けつけない」ということです。マーはローズのぬれた服を脱がせて借りた毛布をかけてやりながら、ひとつのことを考えていました。その思いはすぐ娘に伝わりました。娘がうなずくと、マーは立ち上がってみんなを追い立てながら農具の置き場に行き、間仕切りを閉めました。

ローズは毛布をまとめて男の傍に横たわり、男の顔をやさしく引き寄せて乳房を差し出したのでした。

以上5回にわたって『怒りのぶどう』の内容をご紹介してきました。この作品は、社会的な悪の摘発というような重いテーマを抱えていますが、貧しいながらも助け合って生きる移住民の姿を生きたりと描き、人間のやさしさや美しさ、たくましさを見せてくれます。

スタインベックは1937年に『フーヴァーヴィル』で移住民と生活を共にしたあと、この作品の前身と見られる『レタスバグ事件』を完成しますがそれに満足できず、さらに全力を投入して改作に努め、1938年暮に『怒りのぶどう』として完成させたそうです。最終段階では疲労困憊して、医者からは執筆はもちろん、ものを読むことも禁じられたということで、この作品に注いだ著者の並々ならぬ情熱が感じられます。

翌1939年に発表されると、すさまじい反響がありました。オクラホマやカリフォルニアでは新聞がこぞって攻撃し、禁書にした図書館もあったといわれます。しかし、問題になればなるほど本は売れて、初版は50万部を突破しました。

1940年にはピューリッツァ賞と、全米図書賞を受賞しています。

この作品が60年以上経った今日でも色あせないのは、この話の内容が現在の社会にもあてはまるからでしょう。機械の発達により生活が便利になった反面、工場などでは人手が以前ほど要らなくなり、失業問題など陰の部分が生じました。到来しつつあるインターネット社会との付き合い方にも、まだ不安な要素が多く残っています。現代の人びとも『怒りのぶどう』の農民と同じような不安を抱いているように思えます。

なお、この作品は全体が旧約聖書の出エジプト記の構成を借りていると一般に指摘されていますので、聖書との関連について触れておきたいと思います。

出エジプト記の枠をあてはめてみると、地主や銀行家は圧制者であるエジプト人、砂あらしは悪疫、国道66号線はエジプト脱出の道、カリフォルニアはイスラエル人が神から約束されたカナンの地がそれぞれ対応します。聖書の表現はほかにも随所に見られます。トムはマーとの別れの対話で、聖書の言葉として「ひとりよりもふたりがよい」(コヘレトの言葉4章9節)とケーシーに教わった言葉を語ります。ジム・ケーシー(Jim Casy)はキリスト(Jesus Christ)のシンボルとして同じ頭文字を使っています。荒野をさまよって新しい信念を得たケーシーは虐げられた人びとのためにストを指導し、その犠牲になって命を落とします。死の直前にいう「きみたちは自分のしていることがわからないのだ」という言葉は十字架にかけられるときのキリストの言葉「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。(ルカによる福音書23章34節)」に対応します。

また、トムの子の名前「ローズ・オブ・シャロン」については旧約聖書の雅歌2章1節に「わたしはシャロンのばら、野のゆり」という表現があります。死産の子どもを川に流す場面は、生まれて間もなくナイル川に流されたモーセの故事を思わせます。名前の由来を考えると、この物語の最後の神秘的な場面も、人間に対する大きな愛の象徴として理解できるように思います。

ちょうど連載中の2003年6月下旬、劇団昴による『怒りの葡萄』の公演(演出ジョン・ディロン)が池袋の芸術劇場で行われました。原作を忠実にたどった2時間半の舞台は、カーテンも使わない非常に単純な装置でありながらも、実際に土を掘ったり水を汲んだりという工夫もあって現実感は十分でした。

登場人物はそれぞれ個性的で楽しく、しっかり者のマーが大きな愛情で全体をまとめ、ローズ・オブ・シャロンの究極の愛の場面をしめくります。重いテーマながら、快い感動をさそう迫真の舞台で、この作品の普遍性、現代性を改めて感じることができました。

さて、English Gardenは皆さまのご支援をいただいて、いつの間にか100回を迎えました。心から感謝申し上げます。勝手ながら、ここでひとまずお休みをいただきたいと思います。長い間のご愛読まことにありがとうございました。

参考文献

(訳書は何種類か参照しましたが、引用部分は筆者自身の訳によりました)

“The Grapes of Wrath,”

John Steinbeck, Penguin Books in U.S.A.,1992.

『スタインベックを読みなおす』

中山喜代市監修、開文社出版、2001年

『スタインベック文学の研究 カリフォルニア時代』

中山喜代市著、関西大学出版部、平成3年

『スタインベック』

20世紀英米文学案内22 石一郎編、研究社出版(株)、1987年

『スタインベック 怒りの葡萄』

集英社版世界文学全集79、野崎孝訳、1980年

『スタインベック 怒りのぶどう』

世界文学全集 - 19 石一郎訳、河出書房新社、昭和37年

『スタインベック 怒りのぶどう』

世界の文学セレクション36、尾上政次訳、中央公論社、1995年

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンスソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。